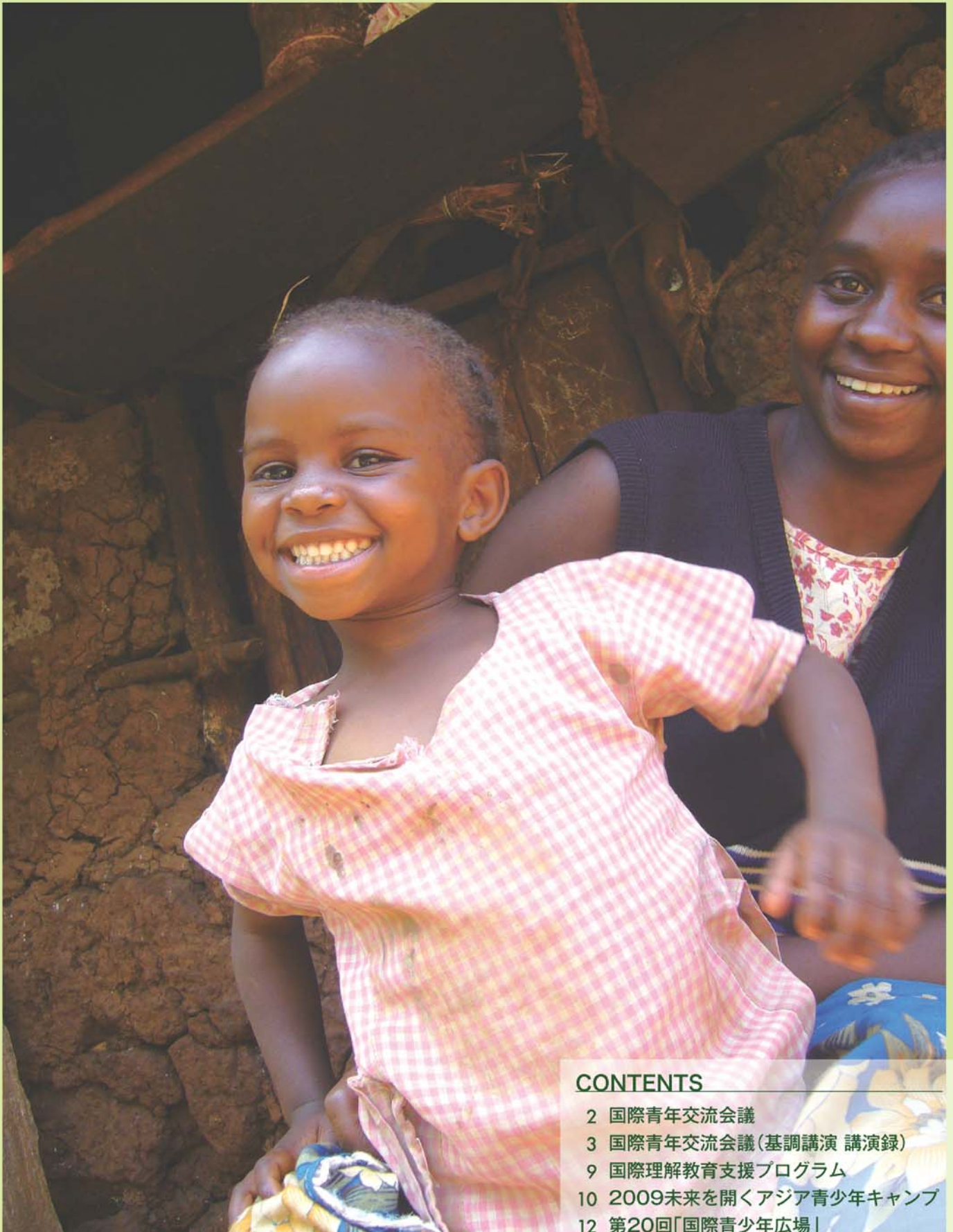


MACROCOSM



CONTENTS

- 2 国際青年交流会議
- 3 国際青年交流会議(基調講演 講演録)
- 9 国際理解教育支援プログラム
- 10 2009未来を開くアジア青少年キャンプ
- 12 第20回「国際青少年広場」



参加青年と懇談される皇太子殿下

天皇陛下御在位20周年記念 内閣府青年国際交流事業50周年記念

平成21年度「国際青年育成交流」事業 国際青年交流会議 International Youth Conference



小淵優子内閣府特命担当大臣(当時) あいさつ

日程：平成21年7月9日～11日
場所：ANAインターコンチネンタルホテル東京
国立オリンピック記念青少年総合センター

国際青年交流会議は、平成6年度に皇太子同妃両殿下の御成婚を記念し開始された「国際青年育成交流」事業の一環として開催される青年たちのための会議です。

この会議では、「国際青年育成交流」事業により海外に派遣される日本青年及び海外から日本に招へいされた外国青年等が一堂に会し、地球規模の諸問題、青年国際交流の在り方、事業参加後の連携の在り方等について討論を行うことにより、青年国際交流の一層の発展にも資することを目的として実施しています。

今年度は、開会式の後、学校法人服部学園理事長、医学博士であられる服部幸應氏による「Let's Shoku-iku」と題する「食育」についての基調講演があり、その後、「青年の社会参加について～地域への貢献を考える～」をテーマにしたグループ討論(分科会)が行われました。



質疑応答の際に質問する参加青年



学校法人服部学園理事長、医学博士の服部幸應氏による基調講演

国際青年交流会議 基調講演

テーマ: 「Let's Shoku-iku」

講演者: 学校法人服部学園理事長、医学博士、服部幸應氏



世界初の食に関する法律

2005年7月15日に「食育基本法」という世界初の食に関する法律ができました。これまで食に関する法律を持つ国がなかったためか、韓国、台湾、中国、ロシア、フランス、イタリア、スペイン、エジプトなど多くの国からどのようにして食を法律にしたのか尋ねられました。確かに、これまで厚生労働省などの機関が、メタボリック・シンドロームに気をつけましようと呼びかけることはありましたが、法律にするのは非常に難しいことでした。実際、食べることをなぜ法律にしなければいけないのかという反対もありました。しかし、私は、食は非常に重要な事柄であり、これからの人類にとって、食に関する教育である「食育」ほど大事な教育はないと考えています。

「食育」には3つの柱があります。一つ目、「何を食えば安全、安心、健康になれるか」、二つ目、「衣食住の伝承」、三つ目、「食料問題」です。順にお話ししましょう。

「何を食えば安全、安心、健康になれるか」

現在、日本の人口1億2,668万8,684人のうち、糖尿病患者の数が880万人、予備軍が1,060万人となりました。インドは、人口11億人のうち糖尿病患者は、4,100万人、中国は、人口13億人のうち、患者数は4,000万人です。人口比率から考えると日本の糖尿病患者が非常に勢いで増えていることが分かります。なぜこれほど急激に増えたのかを研究していますが、沖縄県の例をお話しします。

日本は世界でも冠たる長寿の国で、2000年の統計では女性の平均寿命が85.99歳、男性が79.19歳で、1985年以来、女性は世界でもトップです。日本には47都道府県ありますが、その中でも沖縄の女性の平均寿命はトップ、男性は2位でした。ところが、2006年に男性だけが急に26位に落ちたのです。

我々調査隊が行って調べたところ、ここ30年ほど、沖縄の男性の多くが、肉食を続けていることが分かりました。沖縄県の肉の消費量は47都道府県中で1位ですが、魚や野菜の消費量は全国で最下位です。日本人にはもともと肉を食べる習慣がありませんでした。それまで食べたことのない新しい種類の食べ物に体が慣れるのに、8代、つまり、200年以上かかると言われていました。日本で肉を食べるようになって130年くらいですから、まだ日本人の肉に対するDNAの許容量は未熟なのです。日本人のDNAの中には、肉食による脂肪が増えても、それにすぐに対応できる能力がないのです。

沖縄だけでなく他の県でも少しずつ食生活が変化しています。食生活が変わったため、身長が伸びるなど良いこともありましたが、生活習慣病が急増し、もっと食事に注意を払わなければならないことを痛感しています。そのため、食育の一つ目の柱である「何を食えば安全であり、安心で、健康になれるか」を選ぶ能力は非常に重要です。

「衣食住の伝承」

二つ目の柱は、「衣食住の伝承」です。かつての日本では大家族が普通でしたが、現在では核家族化しています。お姑さんとお嫁さんが一緒に住まないのが、協力して子どもをしつけることもなくなってきています。最近では、はしをうまく使えない若者が増えてきましたが、家族と一緒に食事をする機会が少なくなったためと思われます。かつては、各家庭で食事の際に、「そのようなはしの持ち方はおかしい」と言って、子





どもに正しいはしの持ち方を教えていたものですが、今では、家族そろって食事をする回数自体が少なくなっているのです。どのくらい減っているかという、一般的な年間の食事回数は1,095回ほどあります(1日3回×365日=1,095回)が、今の子どもたちが家族で食事をするのは300回くらいです。ちなみに、現在60歳代の人は、800回くらいはありました。子どもが自分で食べられるようになる3歳頃から8歳くらいまでの6年間に家族と一緒に食事をするのが非常に重要なのに、今や「孤食」といって、一人で食べたり、テレビや漫画を見ながら食べたり、ゲームをしながら食べたりする子どもが増えています。

この「孤食」の影響は様々なところに現れています。昔は相手の目を見て話をしたのですが、最近では会話中にテレビの画面を見ているような、まるで、人間と人間が話しているのではないような不思議な感覚にとられることがあります。私は今、8つほどの大学で客員教授として教えていますが、ある大学の教授が、最近、あいづちを打って話を聞く学生が少なくなったとおっしゃっていました。確かに、話をしても、分かったのか分からないのか反応のない人が多いように思います。「孤食」など人と人とのつながりが薄れているせいではないかと心配しています。

凶悪犯罪が増えた理由

私は今、警視庁の仕事もしています。平成19年度にテレビや新聞に取り上げられた凶悪犯罪は約20件でそのうち、約40名が亡くなりました。でも、未遂に終わった例は、9,051件もあるのです。しかも、昔では考えられなかった無差別に

人を刺す事件が増えていて、20年前の44倍にもなっています。

このような事件が増えた原因として、私は家庭内のつながりが薄くなっているせいではないかと思えます。両親が働いているため、保育園に子どもを預けています。日中、子どもの世話をするのは先生で、お父さんやお母さんではありません。そうすると、親と子の関係が薄くなり、子どもとの間に溝ができます。その溝を埋めるのが、実は食卓なのです。ですから、「食育基本法」とは、「食卓基本法」のことなのです。社会が発展し、経済が拡大すればするほど、人間的なつながりが薄くなっていき、特に、大都会では昔より孤独に過ごさなければならぬ人が増えています。

私が子どもの頃、近所の友だちが遊びに誘いに来たものです。自分より5～6歳年上の子どもたちと、2～3歳年下の子どもたちが一緒に遊んでいました。これを「群れ遊び」といいます。私が保護者の方を対象にした講演会などで、「『群れ遊び』をした経験のある方」と尋ねると、8割が手を挙げます。次に「皆さんのお子さんは、群れ遊びをしていますか」と尋ねると、手を挙げるのは1割ほどで、群れ遊びをする子どもが減っていることがわかります。問題は、12歳くらいまでにこの群れ遊びをししないと、人間は大人になれないということがわかってきたのです。通常、群れ遊びをしている時は、保護者や先生がいませんので、何か困ったことが起きれば、お兄さん役、お姉さん役の子どもがその場を仕切ったものでした。もし、このような体験をすることが全くないとしたら、他の人のことを気につけないという態度が生じて仕方がないのかもしれない。





先ほど、食卓ではしの使い方を教えるという話をしましたが、家族一緒に食事をしていると、「そんなはしの持ち方はおかしい」とか「あごをテーブルにくっつけて食べてはいけない」など親から注意されることがありますから、子どもも気をつけます。しかし、「孤食」などを習慣とし、人から注意されないで過ごす、子どもはわがままになります。わがままになると、人から注意された時に「むかつく」ようになって、「うるさいことを言うな」という態度になり、容易に人に危害を加えるようになるのです。これが、凶悪犯罪が増えた原因ではないかと思っています。

はしをきちんと使えるエリート

私は現在、栄養士や調理師を養成する学校を経営しています。学校には、留学生や、先生もいらっしゃいます。各国の先生方と一緒に食事をする、とても上手にはしを使います。「はしを使うのが上手ですね。どちらで習ったのですか」と訊くと、「最近では、きちんとはしを持ってないと、エリートだと見なされないんですよ」という答えが返ってきます。はしがきちんと持てないために日本人がエリートでなくなってしまうのはさみしいものです。先ほどお話ししたように、はしの使い方等については、各家庭で教えるものだと思います。

日本の食料自給率は？

さて、食育の3本柱の3番目は「食料問題」です。皆さんは「食料自給率」をご存知でしょうか。「日本の食料自給率はカロリーベースで何パーセントか知っていますか」と質問すると、残念ながら、答えられる日本人は1～2パーセントしかいません。

今日は、6か国の外国青年が来ておられますが、皆さんはご自分の国の食料自給率をご存知ですか。私は年に4～5回、日本の食文化を伝えるために海外に招かれますが、そこで同じ質問をすると半数以上が手を挙げます。日本には、エネルギー問題、食料問題などを扱う授業がないのが一因だと思います。

今から45年前、フランスのドゴール大統領が、「食料自給率が100%でない国は独立国家ではない」と言いました。当時のフランスの食料自給率はカロリーベースで104%でした。これを聞いたフランスの周りの国が慌てたそうです。当時の英国は、46%、ドイツが68%、アメリカは102%でした。日本は当時は74%だったのですが、今では40%しかありません。英国は今では、72%ありますし、ドイツは90%、フランスは122%、アメリカは128%です。日本は、独立国とはいえないくらい低いわけです。

こうなってしまったのには理由があります。日本は、近代化を図るため、工業化を進め、モノを作って輸出することにしたのです。農業国から工業国になろうとしました。今から45年前、日本で農業に従事していた人は1,450万人くらいいました。現在では、299万人です。そして、この299万人のうち半数以上が65歳以上で、農業を継ごうという若者が少ないのです。これにはいろいろな原因があると思いますが、農業でもっと収入が上がるような方法を考える必要があります。

漁業も同じような状況で、かつての漁業人口は300万人だったのですが、今では20万4千人で、そのうちの37%が65歳以上です。後継者がいる人は、20.1%にすぎません。後継者の割合が3割を超えないと、その仕事は絶えてしまうのです。これは大きな問題ですね。こうした状況は、構造的に変化さ





せなければならぬので、現在、農林水産省と共によい方法を模索しています。

皆さんの国も、これからもっと工業化を図りたいとか、近代化の中でもっと収入を上げたいとか、いろいろお考えだと思います。日本もかつてそうでした。日本はその夢を果たそうとして、ものすごい勢いで進んできました。そのおかげで、日本はお金を持てるようになりましたが、失ったものも多かったのです。皆さんは、「サスティナブル」、「持続可能な」という言葉をご存知ですか。これからのキーワードになると思いますが、エコロジーとも言います。これからは、サスティナブルな世界を構築していかなければならないと思います。私たちは、自分が生まれた時から、次に生まれてくるものを大切にするようなエンドレスな形で地球を守っていかなければならないのです。

アリの生き方に倣う

例えば、アリのことを考えてください。アリはすでに100万年以上生きています。この間にアリがしてきたことは、自然を破壊せずに土地を耕して、ある部分は自分たちの栄養分として摂ることでした。一方、人間は、産業革命以来わずか100年で、空を汚し、水を汚し、地球にとってとりかえしのつかないことをしてきたのです。

私が感銘を受けたレイチェル・カーソンというアメリカの生物学者が書いた本があります。1962年に出たSilent Spring (『沈黙の春』)という本です。カリフォルニアのクリアリバーという避暑地に飛んでくる渡り鳥のカイツブリが1940年代にどんどん死んでしまいました。レイチェル・カーソンが調

査したところ、肝臓と筋肉の一部にDDTとかDDDといわれる有機リン系の農薬が蓄積されて死んだのがわかりました。さらに、あたり一帯は過去にDDTとかDDDといわれる薬が散布されたことも判明しました。このあたりは避暑地なので、夏には大勢の人がやってきますが、人を刺すブヨが大発生したことがありました。駆除するために、1940年代に発明されたばかりのDDTとかDDDといわれる薬を7,000分の一に希釈して撒いたところ、その後、5年間はブヨが発生しなかったそうです。ところが、またブヨが出たので、今度は5,000分の一に希釈したものを撒きます。ところが、2年後にまた発生してしまいます。虫にどんどん耐性ができてくるのです。人類が作った毒を毒だと思わないで生きていけるような耐性を備えてくるのです。この毒が、雨水となってクリア湖の中に入ります。プランクトンがこの毒を食べ、プランクトンを小さな魚が食べ、大きな魚が小さな魚を食べ、飛んできたカイツブリがその大きな魚を食べることになります。毒が濃縮されたものを食べるわけですから、カイツブリが死んでしまうのです。

この本を読んで、人類とは、自然界の中のすばらしいものを発見するのはよいけれど、自然を破壊するようなものを発明してしまうことに気づきました。このような現実を公にして、規制することが大切だと思いました。

皆さんの国でも、このエコロジー問題に関しては、色々な角度から勉強されていると思います。何せ、20世紀までのほとんどの考え方は、大量生産、大量消費、大量廃棄が主流でした。19世紀から20世紀にかけて、だんだんブレーキがかかってきたと思いますが、今や、自分さえ生きていければい





いという時代ではありません。この21世紀が終わるまでに、この地球を22世紀、23世紀の方々に引き継いでいけるようにすることは、少なくとも我々の義務だと思います。このことを皆さんにもこれから声を大きくして言っていただきたいのです。

豊かな生活をするわずか8%の人々

私はこの地球のことも考えながら、今、世界に対して「食育」を発信しようとしています。昨年、11月に発表された数字によると、世界の人口は67億5千万人ですが、現時点では、68億を超えていると思います。この68億のうち、食べることも含めて本当に豊かな生活を送っている人は何割くらいいると思いますか。実は、およそ8%、約6億5,000万人しかいません。残りの人々のうち、食べ物がまともに手に入らない人は11億人になろうとしています。なんと、全人口の2割の人が食べ物で苦労しているのです。餓死する人は1日2万5,000人います。年間で900万人です。そのうちの35%が5歳未満です。

日本は、大量生産、大量消費、大量廃棄をしてきた国で、EU諸国より2.5倍も多くの残飯を出しています。約2,000万トンにもなります。国連やその他の組織が食料援助をする量が900万トンから1,000万トンです。その倍の量を日本は平気で捨ててしまっているのですから、もっと気をつけなければなりませんね。私は、若い人たちに残飯を出さないように言っています。

さらに、現在、地球の人口は68億を超えています。地球上では、80億人分の食料が生産されているのです。それなのに、餓死する人がいるということは、何か偏っているのですね。

きちんと考えなければならない問題です。

病院の食事がおいしくないと感じる理由

皆さんの中で、病院の食事を召し上がったことのある人はいますか。病院の食事はなぜか評判がよくないですね。確かに、病院も予算に合わせて食事を作っていますから、あまり豪華にすることもできませんし、料理にも問題があるかもしれません。しかし、何よりも、食事をする場所についている照明がよくないのです。病室の明かりは蛍光灯ですが、蛍光灯は勉強したり、仕事をしたりするのに適しています。蛍光灯は赤いものが紫色に見えますので、病人の顔色がさらに悪く見えてしまいます。食事をするときに最適な照明は、ろうそくです。皆さんの中には、ランプをともして食事をしたことのある方もいらっしゃるかもしれません。ろうそくの下で食事をする、食事のお相手が10歳は若く見えます。アンチエイジングですね。著名な脳学者の茂木健一郎さんと「食と脳との関係」という研究を行いました。ろうそくの光の下で食事をする、なぜ、食事が美味しそうに見えたり、お相手がきれいに見えたりするのかと尋ねたことがあります。ご存知のように、ろうそくの光はゆらゆらしていて、光ったり、影になったりする部分ができます。すると、脳は、影の部分をよく見ようとするそうです。よく見よう、よく見ようすると、一種の錯覚で、きれいに見えるのだそうです。

白熱球と免疫力

今から19年前、アメリカのノースキャロライナのデューク大学で蛍光灯と免疫力の関係についての調査をさせていただ





いたことがありました。大学病院に入院している患者さんの半数には、蛍光灯の下で食事をしてもらい、半数は白熱球の下で食事をしてもらいました。何日間で退院できるかを調べたところ、蛍光灯の下で食事をした方は平均3週間かかったのですが、白熱球の下で食事をした人は2週間だったのです。照明を変えるだけで免疫力が上がることが分かったのです。

それから、においも関係がありますね。病院はあのクレゾールのにおいが強いので、食欲がなくなってしまいます。でも、食事ができないと体力がつかえません。体力がないと、薬が効かないのです。体力をつけるのは薬ではなくて食べ物なのです。食べ物がうまく吸収できないと、いくら薬を飲んでも治りません。コルチゾールという副腎皮質ステロイドホルモンが低下して、免疫機能が下がります。

でも、よい香りがすると免疫力が上がります。焼き鳥の屋台の前を通るといい香りがしますね。焼き鳥をやくジュージューというおいしいような音もします。これが、脳を刺激して、トリプトファンという必須アミノ酸が分解されてできるセロトニンという脳内物質が出ます。すると免疫機能がぐっと上がるということがわかっています。

このように、学校や病院に対する環境整備も非常に重要です。よい環境を備えていくことも食育にあたります。このようなことも含めて、我々の健康を向上させることも今後考える必要があります。

さて、更年期障害の症状をやわらげるには、大豆イソフラボンが効果的だと言われています。このイソフラボンの中に

含まれるダイゼインだとか、ゲネスティンという物質が腸に到達した時、腸の中のラクトコッカス20-92株という乳酸菌がいると効き目があります。ラクトコッカス20-92株は、日本人の女性の7割が持っていますが、欧米人は35%の人しか持っていません。このラクトコッカスと、先ほど述べたゲネスティンが腸の中で接触するとエクオールという物質に変わります。このエクオールができると、更年期障害による症状を改善し、ガンにも効くのではないかとということで、研究が進んでいます。現在では、腸内にラクトコッカス20-92株を持っていない人にも効果があるように、このエクオールという物質をサプリメントとして製造し始めました。このような開発にも協力していきたいと思っています。

まとめ

今日、お話しした様々なことを全て含めて、「食育」と呼んでいます。今日は、「食育の3本柱」についてお話ししました。1つ目は、何を食えば安全なのか、危険なのか、健康になれるのかを選ぶ能力について。2番目は、衣食住の伝承について。3番目は、食料問題、大量生産、大量消費、大量廃棄についてでした。

このように我々は大きな課題をたくさん抱えています。生きていく上で目をつぶってられないような内容で、実は、食に関するものが多いのです。ですから、このような事柄をぜひ、世界に知らしめていただきますよう、若い皆さんに大いに期待しています。



平成21年度 第1回「国際理解教育支援プログラム」

(財)青少年国際交流推進センター (CENTERYE)は、青少年国際交流事業の実施、青少年国際交流に関する啓発、情報提供、支援などを通じて、社会の各分野において国際化時代にふさわしい青少年の育成を目標としています。その具体的な活動の一つとして、内閣府青年国際交流事業に参加した在日外国青年等を日本の学校等に派遣する「国際理解教育支援プログラム」を平成16年度から実施しており、今回は、平成21年度第1回のプログラムの報告をします。

実施先：東京都立大塚ろう学校江東分教室
 場 所：東京都江東区西大島
 日 時：平成21年7月6日(月) 13:20～15:30
 担 当：赤司郁子教諭(平成6年度「国際青年育成交流」事業(トンガ)副団長)
 参加者：小学5年生、6年生児童 計7名

◆講師

派遣された既参加青年	出身国	参加事業
Chew Kim Soon	マレーシア	SSEAYP26
Anna Gruebler	ベネズエラ	SWY15、21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい'06

◆スケジュール

時間	内容
13:20-13:40	導入 講師自己紹介(出身国の概要、言語など)、活動内容の説明
13:40-14:40	「相手を知ろう」(2グループ) 2つのグループに分かれ、習った単語を使って英語で質問をする(身振り手振り、イラストを駆使して相手のことを聞く)
14:40-15:30	「劇遊び」 2つのグループに分かれ、最初に子どもたちが紙芝居の内容を講師に伝え、次に講師と子どもたちが紙芝居を演じ、相手のグループに物語を伝える活動



「こぶとりじいさん」の鬼役を演じるSoonさん

◆担当教諭の感想

劇遊びの活動は、私にとっても初めての試みで、実際にどうなることが不安でしたが、SoonさんやAnnaさんがとても上手にフォローやリードをしてくださったおかげで、なんとか形になりました。

子どもたちも制約がある中で、彼らなりに一生懸命に伝えようとしていたこと、そして生き生きと楽しそうだった様子は、なかなか日頃は見られない姿もあり、大きな成果が得られたと思っています。子どもたちは生まれて初めて接した外国人との交流のことを、きっと大人になっても忘れないのではないかと思います。このような経験の機会を与えてくださった貴センターに心から感謝します。



「浦島太郎」の乙姫役を演じるAnnaさん

本プログラムの利用、参加を希望する方は
 e-mail: iesp@iyeo.or.jp tel: 03-3249-0767
 fax: 03-3639-2436 までお問い合わせください。



赤司先生から活動のねらいを熱心に聞く参加者

2009未来を開くアジア青少年キャンプ

平成21年7月30日(木)～8月13日(木)、韓国保健福祉家族部主催の「2009未来を開くアジア青少年キャンプ」がソウル市を中心に開催されました。

この事業は、アジア青少年の交流を通じ、未来を担う主役達の共同協力案と相互理解を強化させることを目的として行われており、今年度は「アジアの未来と私たちの情熱」というテーマのもと、アジア全域から約300名の青年が集いました。

(財)青少年国際交流推進センターでは日本青年9名の募集・選考及び事前研修を実施しました。

日程

7月30日	オリエンテーション、アイスブレイキング
7月31日	オープニングセレモニー、文化講義「韓流」、江原道へバス移動
8月1日	韓国語講座
8月2日	韓国語講座(発表会)、クイズ「アジアを知ろう」、フードフェスティバル
8月3日	スポーツ大会、ドミノ大会、韓国語講座
8月4日	伝統文化紹介、パーティ「アジアの夜」
8月5日	韓国文化体験(陶器)、韓国民俗村見学
8月6日	ITフィールドトリップ、オプション体験旅行、韓国文化探索準備
8月7日	韓国文化探索I
8月8日	韓国文化探索II、韓国文化探索(まとめ)
8月9日	韓国文化探索(発表会)、ソウル市ツアー、伝統演劇見学
8月10日	ホームステイマッチング
8月11日	ホームステイ
8月12日	評価会、フェアウェルパーティ
8月13日	帰国



フードフェスティバルでちらし寿司とお好み焼きを出品



陶器づくり体験



キルギス青年による文化紹介



ドミノを使って自国を表現する



韓国語のレッスンの成果を披露する青年



韓国語講座を受講する



韓民族村に集合



ミニオリンピックで
スポーツを楽しむ



伝統衣装を纏って開会式に参加



韓国式の茶道を体験する

2009未来を開くアジア青少年キャンプに参加して

千葉県 石原 裕文

平成19年度「国際青年育成交流」事業(カンボジア)参加青年

このキャンプに参加した理由はいくつかあるが、そのうちの1つは2年前に参加した内閣府「国際青年育成交流」事業カンボジア派遣へのリベンジである。国際交流とは何ぞや?という状態で参加したカンボジア派遣では、なかなか主体的に行動することができずに周囲に従うばかりで、また、ディスカッション等においても自分の意見をうまく伝えられない等、今振り返ってみると完全燃焼しきれなかった。その時の悔しい思いを挽回すべく、今回のプログラムへの参加を決意した。

上記の目的を実現すべく、今回は①韓国語の習得、②韓国文化および参加国文化の理解、③日本文化の発信、④仲間を100人つくる、⑤とにかく楽しむ、の5点の目標を立てた。この目標については概ね達成できたのではないと思う。期間中は極力多くの国の青年と交流するように自ら心がけた。まずは相手の国の挨拶を覚えることから始まり、次第に日常生活や若者文化など、そして政治に対する認識や宗教観などについてもわずかだが話すことができた。2年前にカンボジアに行った時に比べると随分自信を持って話せるようになった。それはこの2年間で培った国際交流経験や自国文化の学習などの成果が形として表れたのだと捉えたい。気張らず、オープンマインドで外国青年と接することができ、アジア22か国に多くの仲間が増えたのは大きな財産である。

今回のプログラムを通じて改めて実感したことは、「交流したい!!」という強い意志と話す勇気さえあれば、たとえ言語に少々

の難があったとしても何とかなる、ということである。自分の考えを伝えたい、相手のことを理解したいという思いは、必ず話している相手にも伝わる。やはり他国の青年が日本の話題を持ちかけてくれるのは嬉しいし、こちらとしてもできるだけ答えられることは答えたい。結局、そんなやり取りの繰り返しで相互理解につながるのではないかと今回のプログラムを通じて再認識した。一般に、国際交流は特別なことと捉えられることが少なくないが、私はそうは思わない。アジア22か国の青年と共同生活して感じたのは、国籍や文化・価値観の違いこそあれ、やはり彼らは普通の青年、普通の若者であるということだ。同じ所で楽しみ、笑い、哀しむ。ある韓国青年の発した言葉が印象的である。「このプログラムに参加してから、外国青年を「外国人」としてではなく「同じアジアの仲間」と考えるようになった。みんな何も変わらないんだよね」このキャンプで、世界の仲間のネットワークは広がったが、逆に私の中の世界は狭くなった。今回参加できたことに対して本当に感謝している。

アジアの外交や国際協力にはまだまだ多くの問題点が山積している。今回のキャンプを通じて、お互いの国への理解を深めるためにはより一層、多分野にわたる勉強が必要だと痛感した。次に彼らと再会する際には、このキャンプのタイトルである「アジアの未来」について意見が交わされるように精進したい。

このキャンプに携わったすべての方々へ「감사합니다!!」(ありがとうございます)



(筆者左側)

第20回「国際青少年広場」

平成21年8月18日(火)～8月25日(火)、韓国保健福祉家族部主催の第20回「国際青少年広場」がソウル市を中心に開催されました。

この事業は、世界中の青少年が集い、あらゆる問題に対し代案と解決策を模索するディスカッションプログラムで、今年度は“Climate Change and Green Growth”をテーマに、およそ30か国、120名の青年が環境問題について話し合いました。

(財)青少年国際交流推進センターでは日本青年6名の募集・選考及び事前研修を実施しました。



講演を拝聴する



各国青年との顔合わせ



会社の環境貢献について各国で意見交換する

日程

8月18日	オリエンテーション アイスブレイキング
8月19日	開幕式・ウェルカムパーティー Keynote Speech and Q&A フィールドサーベイ1 ソウルからクェサンへ移動
8月20日	フィールドサーベイ2 フィールドサーベイについてのまとめ
8月21日	フィールドサーベイについてのプレゼンテーション グループディスカッション1
8月22日	基調講演 ケースプレゼンテーション 模擬裁判
8月23日	グループディスカッション2 ソウル宣言文作成に向けての準備と会議 文化交流イベント
8月24日	クェサンからソウルへ移動 ソウル市内散策 閉幕式
8月25日	帰国



参加者全員で記念撮影



韓国青年によるパフォーマンス



休憩時間の歓談



日本青年によるプレゼンテーション



閉幕式で授与された
修了書を手にして

第20回「国際青少年広場」に参加して

奈良県 吉田 侑紀子

平成19年度「国際青年育成交流」事業(ミャンマー)参加青年

【今回のプログラムに参加したきっかけ】

今回の国際青少年広場の応募に至った動機は2点あります。まず、「Climate Change and Green Growth」というテーマの下、環境問題を国際的な視点で考える機会を持ちたいと思ったことです。環境問題については、以前からテレビや新聞、大学の講義を通して興味を抱いていましたが、今回、約30か国から集まる青年たちと共に、より広い視野で環境について考えることで、「地球市民」の一人としての意識を高め、私たちの将来を考えるきっかけにしたいという想いを持っていました。そして、もう一つの動機は、アジアのみならずヨーロッパ、アフリカ、中東、アメリカなど世界中から集結する様々なバックグラウンドを持つ青年たちと交流を深めたいと考えたことです。交流を通して「日本」を発信し「世界」を知り、個人レベルでのつながりを築くことで世界に新たな橋を架けたいと思い、参加させていただきました。

【達成目標と達成度】

今回のプログラムでの具体的な目標は、「相手の意見に耳を傾け、自分の意見もきちんと伝えること」でした。学校や会社など、日常生活の場面でも心得ておかなければいけないことかもしれませんが、国際交流の場ではより一層必要なことだと思い、あえてこの目標を胸にプログラムに参加しました。プログラム全体を通して、相手の意見に耳を傾けるという目標は、楽しみながら達成できたと思います。参加青年の考えに触れるうちに、改めて自分の住んでいる国、「日本」のことをしっかりと見つめ直さなければいけないと感じました。一方で、自分の意見をきちんと伝えるという目標は、自分が納得できるほどは達成できませんでした。外国人青年のディベートの力やプレゼンテーションの力量に圧倒された1週間でもありました。たとえ、自分の意見を英語で100%伝えられる自信がなくても、自分の意見が正しいかどうか分からなくても、積極的に自分から「伝える」トレーニングをしなければいけないという励みにもなりました。

【今回の経験をどのようにいかすか】

私は、今回のプログラムに参加して、日本人として、また同時に、個人として「誇り」と「課題」を感じるが多々ありました。例えば、外国人青年とのディスカッションを通して、環境に対する日本の意識が高い点を賞賛してもらったことは、日本人として「誇り」を感じた瞬間の一つでもありました。日本に住む若い世代の一人として、環境問題をはじめとする様々な世界共通の問題を考えるときに、「世界の中の日本と私」という視点を持ち続けることが大切だと思いました。一方で、これから個人的に「課題」にしなければいけないと思ったのは、自分の考えを伝える力が不十分な点です。これを克服するための一歩として、普段から様々な情報に触れ、自分の考えをしっかりと持つことや、それを伝えるための語学力を向上させる努力をしていきたいと思っています。また、自分の引き出しをたくさん作るために、国際交流の分野のみならず、様々なフィールドにおいて自己啓発に取り組んでいきたいと考えています。



自然の中で環境について考える(筆者左手前)

NPO運営研究会議(NPOマネジメントフォーラム)2010 日本参加者募集

事業の趣旨

「NPOマネジメントフォーラム」(第8回NPO運営研究会議)は、高齢者・障害者・青少年の三つの分野の非営利セクターで活躍する日本と諸外国の青年が一堂に会して、各国のNPO事情や活動事例に基づく有益な情報を共有し、実践的な意見交換を通じてNPO運営に関する能力の向上をはかり、それぞれの分野において社会活動を支え、その中心的な担い手となる青年リーダーを育成することを目的として実施します。

事業概要

【ディスカッションの総合テーマ】

「NPOにおける事業運営マネジャーの育成－(How to Develop Operational Managers in Non-Profit Organizations)」

【ディスカッション・トピック】

NPOマネジメントフォーラムでは、参加者は二つのディスカッション・トピックのいずれかに属し、ディスカッションを行います。

1. 事業運営マネジャーとしての能力向上

事業運営マネジャーとしてどのように自分自身の能力を向上させていくのかを考え、効果的に事業を運営するために必要な能力の向上を目指す。さらに、それらの能力を高め活用していくための方策について情報交換を行い、どのような研修が効果的なのかを話し合う。
対象者：実際の活動や事業の責任者・担当者(プログラムリーダー、セクションリーダー、現場責任者、主任・係長クラスなど)

2. 事業運営マネジャーの育成への取組

団体(組織)の中で事業運営マネジャーをどのように育成していくのかの観点から、組織構成・育成プログラム・評価などについて討議を行い、効果的な育成の取組を見出す。
対象者：組織運営責任者(次世代の育成を考えている人)

【日程】

平成22年2月4日(木) 13:00 受付 / 13:30 開始

～ 2月7日(日) 15:30 終了(予定)

<日程案>

日付	午前	午後	夜間
2月4日(木)		13:00 受付 / 13:30 開始 日本参加者研修	※全体オリエンテーション アイスブレイク
2月5日(金)	開会式、各国からの発表、グループ・ディスカッションなど		交流会
2月6日(土)	グループ・ディスカッション		
2月7日(日)	成果発表の準備 成果発表会	歓送昼食会、 評価会、修了式 15:30 終了	

※外国参加者は2月4日(木)に日本のNPOについて課題別視察を行い、全体オリエンテーションから参加します。

募集要項

【開催期間】 平成22年2月4日(木)～7日(日)

【会場・宿泊】 国立オリンピック記念青少年総合センター

【主催】 内閣府・財団法人青少年国際交流推進センター

【参加者】 日本参加者 約40名
外国参加者 39名(「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」で招へいする英国、フィンランド及びドイツの青年各13名)

【対象者】

- 全日程に参加可能な方
- 23歳から概ね40歳まで
- 日本を活動基盤とする非営利セクター*(高齢者・障害者・青少年分野)で3年以上の活動歴のある方(職業・ボランティアの別を問いません)
- 上記非営利セクターと関連がある活動もしくは仕事をされている方
英語力は問いません(基本言語は日本語とし、英語通訳がつかます)
*非営利セクター：このフォーラムでは、社団法人や財団法人、学校法人、医療法人、社会福祉法人などの公益団体、特定非営利活動促進法に基づく特定非営利活動法人、協同組合、社会貢献活動を行う営利を目的としない任意のボランティア団体などを対象としています。

【募集人数】 約40名

【参加費】 無料

- 期間中の食費・宿泊費は主催者負担
- ボランティア保険に加入します。(保険料は主催者負担)
(開催会場までの往復交通費は自己負担)

【応募方法】

以下の提出書類を、Eメールまたは郵送で提出してください。

【提出書類】

(1) 申込書 <http://www.iyeo.or.jp/centerye/event/2010nptomf/application.doc>
ウェブサイトからダウンロードできます。郵送ご希望の方は、問い合わせ先までご連絡ください。

(2) 作文：ディスカッション・トピックの志望動機
(和文、1,000字程度、WordであればA4約1枚)

【締め切り】 平成21年12月10日(木)必着

【提出先及び問い合わせ先】

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階
(財)青少年国際交流推進センター NPO マネジメントフォーラム担当(藤井)
TEL: 03-3249-0767 / FAX: 03-3639-2436
E-mail: core@iyeo.or.jp / URL: <http://www.centerye.org/>

【決定通知】

応募者多数の場合は、選考の上、結果を平成21年12月25日(金)までに、ご本人へEメールまたはFAXにて通知します。

今月の表紙

第4回グローバル・フォト・コンテスト
テーマ：「次の世代に遺したいもの」

タイトル：瞳の中の光
撮影者：森本 有希(SWY17、日本)
撮影場所：ケニア、エンブ
コメント：道端で出会ったMother Teresaという名の愛らしい少女とその母親。
無邪気な笑顔をいつまでも…



編集後記

おいしいものがたくさん登場する季節ですが、今号に掲載した「国際青年交流会議」の基調講演後の質疑応答の際に、服部幸應先生が、食事を3～4割減らすと、免疫力が上がるとおっしゃっていました。サルを使った実験では、食事をカットしたサルのほうが、肌もきれいで、しわも少なく、毛並みも美しくなったそうです。理由はわかりませんが、なかなか実践が難しく反省してばかりです。(3)

MACROCOSM 10月号 vol.87

2009年10月31日発行

編集 マクロコスム編集委員会

発行 (財)青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階

TEL: 03-3249-0767 FAX: 03-3639-2436

E-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centerye.org/> (CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp/> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構(IYEO)

定価 200円 [本体191円]

印刷所 株式会社デックス

TEL: 03-3400-8089 FAX: 03-5469-5270



ココロ花咲く、ステキな旅を。

支店名	電話番号
札幌支店	011-221-0821
青森支店	017-723-3671
八戸支店	019-651-8800
仙台支店	022-263-3232
秋田支店	018-866-0106
山形支店	023-641-4141
福島支店	024-523-4451
新宿支店	03-3340-0600
横浜支店	045-326-1120
水戸支店	029-224-6627
宇都宮支店	028-636-7761
高崎支店	027-325-3201
大宮支店	048-640-1009
千葉支店	043-243-0109
新潟支店	025-243-1515
甲府支店	055-222-0384
長野支店	026-226-4315
富山支店	076-431-7638
金沢支店	076-233-0109
福井支店	0776-23-2800
岐阜支店	058-263-4657
静岡支店	054-255-1919
浜松支店	053-453-0166
名古屋支店	052-232-1091
三重支店	059-221-3331

支店名	電話番号
大阪支社 営業部	06-6344-3933
滋賀支店	077-565-0109
京都支店	075-361-5351
神戸支店	078-221-1090
姫路支店	079-224-5761
奈良支店	0742-23-2371
和歌山支店	073-425-3211
鳥取支店	0857-23-2001
松江支店	0852-21-5425
岡山支店	086-225-1746
広島支店	082-545-1090
徳島支店	088-622-8991
高松支店	087-851-6666
松山支店	089-941-9231
高知支店	088-825-0109
下関支店	0832-31-3611
福岡支店	092-739-0010
佐賀支店	0952-26-1131
長崎支店	095-827-4151
熊本支店	096-354-5765
大分支店	097-538-1091
宮崎支店	0985-25-6111
鹿児島支店	099-257-0109
沖縄支店	098-868-8822

国際会議から出張まで、
お問合せは、上記支店またはお近くのトップツアー各支店へ

お客様満足度100%+αを追求するサービスマインド。

お客様の立場になる「想像力」、プラスアルファを創る「創造力」。

50年の実績と豊富な情報力を駆使して

高品質・高付加価値の商品とサービスを提供するトップツアー株式会社。

私たちは、旅を通じて新しい出会いと感動を創出する

[旅行インテリジェンス企業]です。



東急観光が社名を変えました。

トップツアー株式会社 新宿支店

官公庁長官登録旅行業第38号 ©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目B番1号

<http://www.toptour.co.jp>

03-3340-0600



10450055(02)
2020001200(旅)

愉しみ



NIPPON MARU

新しくなったにっぽん丸をお楽しみください。

美食

おもてなし



ワンナイト、週末利用、東京発着のおすすめクルーズをご紹介します。

神戸ゆったりワンナイトクルーズ

神戸→神戸

2010年4月21日(水)～
4月22日(木) 2日間

■旅行代金 (大人お一人様・税込) 40,000円～190,000円

夕暮れの神戸を背景に出航し、極上のディナーとショーを満喫。瀬戸内海の多島美を一望する、クルーズのならではの体験も楽しみです。



【タンゴ歌手】
冴木 杏奈

ウィークエンド新宮・館山クルーズ

横浜→新宮→館山→横浜

2010年4月23日(金)～
4月26日(月) 4日間

■旅行代金 (大人お一人様・税込) 127,000円～600,000円

世界遺産「熊野古道」の入口、新宮に寄港。館山では、4月完成予定の館山栈橋に客船として初寄港。盛大な歓迎行事が予定されています。



【音楽家】
宮本 文昭&ウインド・アリエス

春の八丈島クルーズ

東京→八丈島→東京

2010年4月26日(月)～
4月28日(水) 3日間

■旅行代金 (大人お一人様・税込) 82,000円～400,000円

八丈富士の雄大な景観、年間を通じて温暖な気候が魅力の八丈島へ。島の歴史を伝える名所や絶景ポイントなど、八丈島の見どころを巡る『八丈島周遊バス』を企画しています。



【サクソ奏者】
MALTA

※表示の代金はコンフォートステートグループ3(1室3名利用)～グランドスイート(1室2名利用)の大人お一人様(航海中全食事付/消費税込)旅行代金です。
※このほかにも各種クルーズがございます。お気軽にお問い合わせください。※掲載の写真はイメージです。

商船三井客船
〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三井ビル5F

お問い合わせ・お申込は商船三井客船クルーズデスク
0120-791-211

URLが変わりました
<http://www.nipponmaru.jp>

ボンド保証会員